

# 情報活用力の習得を目指した 情報リテラシー教育の実践と考察

佐 伯 勇

Evaluation of education that aims to  
provide practical knowledge on information literacy

SAEKI Isamu

**Abstract** : In this study, I describe the curriculum and management rule of the class for information literacy education at Konan Women's University. Furthermore, I reveal the aim and management rule of the class for providing practical knowledge on information literacy. By referring to the results of the evaluation of the classes, I clarify the problems concerning information literacy education at the university.

## は じ め に

甲南女子大学では、2001年の2学部化改組と同時に、情報リテラシー教育の拡充を図った。それまでの情報リテラシー科目は選択科目のみであったが、2001年には、全学共通科目メディア科目「情報科目」として、1年次対象必修科目「探検コンピュータ」と、2年次以上対象選択科目「コンピュータの世界」を設置した。2007年に看護リハビリテーション学部が新設された際にも、「探検コンピュータ」を全学部統一内容による必修科目として位置づけ、全学部に共通する情報リテラシー能力の育成を目指している。

2003年には、高等学校において情報教育が必修化され、その3年後となる2006年には、情報教育を履修した新生を迎えることになった。高等学校の情報教育必修化に伴って、WordやExcelなどのアプリケーション操作スキルを中心とする情報教育は大学では不要になるのではないかという議論もあったが、入学者の平均的な操作スキルが2006年の前後で急激に変化することはなかった。しかし、高等学校での情報教育を前提とした応用的な授業内容の模索や、アプリケーションの基本操作説明を要しない一部の入学者への対応などの重要性は、徐々に高まってきた。

そこで2010年より、「探検コンピュータ」の前期はアプリケーションの基本操作主体、後期は情報の収集・分析・整理・保管・表現・運用といった情報活用力の習得を目指した授業構成に転換した。また、アプリケーションの基本操作説明を省略した演習中心のクラスを設け、学生のニーズに対応する試みを行っている。

筆者は2001年に、本学における情報リテラシー教育について、ビジネス文書作成・アプリケーション操作の偏重など9つの問題点を指摘し、情報科目全体の基本方針を定めた<sup>1)</sup>。それ以降現在まで、情報科目のコーディネータを務めると同時に、「探検コンピュータ」と「コンピュータの世界」の授業を担当してきた。2005年には、2001年に定めた基本方針を再点検し、情報セキュリティ・モラル教育の推進や、学生が実生活で作成するような身近な文書作成例題の充実が課題であることを示した<sup>2)</sup>。

本稿ではまず、本学の「情報科目」全体の構成と運用方法の現状について、基本的な考え方を交えて述べる。次に、2010年より開始した、情報活用力の習得を目指した授業の狙いと運用方法について述べ、学生による授業評価結果などを参考にして今後の課題を明らかにする。

## 1 「情報科目」の構成と運用方法

### 1.1 「情報科目」の構成

表 1 に、本学の「情報科目」の構成を示す。カリキュラム構成上の基本的な考え方は以下のとおりである。

- すべての 1 年生に、全学部統一内容の情報リテラシー教育を 1 年間行う。
- 文学部と人間科学部の学生には、技能検定により単位認定をすることで、授業と資格とを明確に切り分ける。
- 2 年生以上には、学生の関心に従って、コンピュータとインターネットの仕組み、クリエイター系アプリケーションの基本操作、情報モラルとセキュリティなどの授業を受講できるよう、選択科目を配置する。
- 文系主体の女子大学であることを考え、プログラミングやマクロなど高度な論理的思考力が要求される科目は当面開講しない。

2011 年度の入学人数 1,018 名に対して、「探検コンピュータ I」および「II」はそれぞれ 33 クラス（うち 1 クラスは再履修専用として）開講しており、1 クラスの平均学生数は約 32 名となる。表 1 の「専任」はすべて筆者であり、「非常勤」は株式会社ワークアカデミーから業務委託により派遣された講師である。

「コンピュータ検定演習」は、技能検定による単位認定のための科目で、表 2 の基準に従って、学生からの申請に基づき単位認定している。なお、Microsoft Of-

fice Specialist 試験にはさまざまなアプリケーションとバージョンが存在するが、Specialist と Expert それぞれについて 1 度しか申請できない。また、単位認定数が 1 となる技能検定で単位認定した場合、「コンピュータ検定演習 I」の単位を認め、その後単位認定数が 2 となる技能検定で単位認定する場合、「コンピュータ検定演習 II」の単位を認めるような方式としており、情報関係の技能検定による認定単位数は最大 4 となる。初級システムアドミニストレータ試験は現在実施されていないが、過去に資格取得した場合の経過措置として単位認定基準表から削除はしていない。

「コンピュータの世界」はそれぞれ 1 クラスずつ開講している。2011 年度の授業内容は、「A I」は情報セキュリティに関する実習、「A II」はコンピュータの分解・組み立てを通じたハードウェアの基礎知識、

表 2 技能検定単位認定基準

検定の種類	級	認定単位数
日商 PC 検定試験 (文書作成)	1	4
	2	2
	3	1
日商 PC 検定試験 (データ作成)	1	4
	2	2
	3	1
初級システム アドミニストレータ試験		4
Microsoft Office Specialist	Expert	2
	Specialist	1

表 1 「情報科目」の構成

授業科目	単位	必修／選択	配当年次	開講区分	担当教員	学部
探検コンピュータ I	1	必修	1	前期	専任 1, 非常勤 6	全学部
探検コンピュータ II	1	必修	1	後期	専任 1, 非常勤 6	全学部
コンピュータ検定演習 I	1	選択	1～			文学部・人間科学部
コンピュータ検定演習 II	1	選択	1～			文学部・人間科学部
コンピュータ検定演習 III	1	選択	1～			文学部・人間科学部
コンピュータ検定演習 IV	1	選択	1～			文学部・人間科学部
コンピュータの世界 A I	1	選択	2～	前期	専任	文学部・人間科学部
コンピュータの世界 A II	1	選択	2～	前期	専任	文学部・人間科学部
コンピュータの世界 B I	1	選択	2～	前期	非常勤	文学部・人間科学部
コンピュータの世界 B II	1	選択	2～	後期	非常勤	文学部・人間科学部
コンピュータの世界 C I	1	選択	2～	前期	非常勤	文学部・人間科学部
コンピュータの世界 C II	1	選択	2～	後期	非常勤	文学部・人間科学部

「B I」は Illustrator と Photoshop の基本操作, 「B II」は Flash と Dreamweaver の基本操作, 「C I」は情報モラルに関する講義, 「C II」はインターネットと社会に関する講義である。実習科目である A と B には 20～30 名の定員を設けているが, いずれの科目も履修希望者が定員を超過する事態には至っていない。なお, 「A I」および「A II」を共に前期に開講しているのは, 筆者の授業担当の都合によるものである。

### 1.2 「探検コンピュータ」の授業運用方法

「探検コンピュータ I」および「II」はレベル別クラス編成を行っている。また, 特に操作スキルの高い学生を対象に, 特別クラスを設けている。特別クラスは, 文学部メディア表現学科の最上位クラスと合併する形で開講している。10 学科の中では, メディア表現学科の学生に操作スキルの高い学生が多いためである。特別クラスでも普通クラスと同じテキストを使用するが, アプリケーションの操作説明を省き, 独自のプリントを併用して演習中心の授業を行っている。

実際のクラス配属は次のような方法で行っている。

- (1) Windows と Office 操作の理解度を確認するスキルチェックシートを, 新入生オリエンテーション時に配布する。
- (2) メディア表現学科の学生はスキルチェックシートを全員提出し, クラス分けを行う。
- (3) メディア表現学科以外の学生は, 希望者のみスキ

ルチェックシートを提出し, メディア表現学科の上位クラス基準と同等以上のチェック項目数がある学生に対して特別クラスの受講を認める。クラス分け結果は速やかに掲示する。

- (4) メディア表現学科以外の学生は, 掲示により初回の教室を指定する。初回の授業では, スキルチェックシートの記入とタイピング速度の測定を行い, クラス分けを行う。その場でクラス指定する必要があるため, 総合得点が上位の学生から順にクラス数で等分割する。当日欠席した学生は初回の教室に配属する。後期も前期と同じクラスとする。
- (5) 初回の授業で PC を用いて履修登録させる。スキルチェックシートの切り離し線以下に, 配属されたクラスの教室と担当教員を記載して学生に渡し, 次週の授業に持参させる。
- (6) 切り離したスキルチェックシートは, クラス分け先の教員個人ボックスを通じて交換される。教員は, 履修登録システム上のデータとスキルチェックシートを照合する。

2011 年度は, 特別クラスが 2 クラス開講された。特別クラス内のメディア表現学科と他学科の学生数は, 最上位クラスで 10 名と 10 名, その次のレベルのクラスで 13 名と 7 名である。他学科の学生で, 特別クラスに応募したが受講が認められなかった学生数は 13 名である。

表 3 探検コンピュータの授業内容

回	探検コンピュータ I	探検コンピュータ II
1	概要説明とクラス分け	概要説明, 情報検索
2	Windows の基礎, ファイル管理, タイピング	情報検索, 情報運用
3	e メールの使い方	情報運用
4	e メール, Word 2010 (チラシ作成)	数値分析 1: 分析の目的と Excel 復習
5	Word 2010 (レポート作成, 書式)	数値分析 1: 分析の目的と Excel 復習
6	Excel 2010 (集計表作成 1, データ集計, 書式)	数値分析 2: 関数の復習と集計
7	Excel 2010 (集計表作成 2, 印刷, グラフ)	数値分析 3: グラフ化と分析, データベース
8	PowerPoint 2010 (スライド作成)	ファイル・データ管理
9	これまでの復習	インターネットコミュニケーション
10	レポートの基本 (目的, アウトライン (Word))	文書表現
11	データ集計・検証 (Excel)	文書表現
12	文章のポイント, レポート作成 (Word)	ビジュアル表現
13	発表スライド作成 1 (構成, PowerPoint)	プレゼンテーション
14	発表スライド作成 2 (PowerPoint, リハーサル)	プレゼンテーション
15	情報モラル	総復習

短期間にクラス分けと結果の告知を行わなければならないため、担当する教職員の負担は少なくないが、学生と担当講師の両方から、特別クラスでの授業は勉強しやすいとの評価をいただいている。

特別クラスの開講時間に必修科目が重なっている場合は、必修科目を優先して受講するよう指導している。この結果、実質的に特別クラスを受講できない学科には、スキルチェックシートを配布しないようにしている。

将来的には、各学科のコマに 1 つずつ特別クラスを配置する可能性もあるが、現状では操作スキルの説明を必要としない学生数はわずかであるため、全学で 1 ないし 2 クラスとして問題ないと考えている。

前期の「探検コンピュータⅠ」では、テキストとして noa 出版の「身近なテーマで作って学ぶ！学生のための Office 2010&情報モラル」<sup>3)</sup>を使用し、主に Office アプリケーションの操作方法を学生生活に関連する題材で習得することを目指している。後期の「探検コンピュータⅡ」では、テキストとして noa 出版の「考える伝える分かちあう情報活用力」<sup>4)</sup>を使用し、情報収集・分析・整理・保管・表現・モラル・セキュリティといった応用的な側面を主体として学ぶ構成としている。具体的な授業内容については、表 3 を参照していただきたい。

また、再履修者が各クラスに少数ずつ配属されると授業運営が難しくなるため、前期集中講義として「探検コンピュータⅠ」と「Ⅱ」の再履修専用クラスを開講している。

### 1.3 「コンピュータの世界」の授業運用方法

「コンピュータの世界 A」および「B」は実習主体の授業であるため、受講人数の上限を 20~30 名に設定している。共に前期初回の授業で説明・抽選会を行うと告知しているが、2011 年度の受講者は、「AⅠ」が 12 名、「AⅡ」が 14 名、「BⅠ」が 17 名、「BⅡ」が 11 名と、いずれも上限には達していない。「コンピュータの世界 C」は講義形式のため受講人数の上限を設定していないが、「CⅠ」の受講者数は 17 名、「CⅡ」は 28 名と決して多くはない。

## 2 「情報科目」の評価と今後の課題

### 2.1 「探検コンピュータ」の評価と今後の課題

「探検コンピュータ」の授業評価アンケートの中で、総合的な満足度を 5 段階で評価する設問について、再

履修クラスを除いて集計した結果、直近の 2011 年度前期では 4.31 (回答数 939)、2010 年度後期では 4.46 (回答数 878) となった。全授業の平均値は 2011 年度前期が 4.07 (延べ回答数 28,078)、2010 年度後期が 4.16 (延べ回答数 22,340) であり、「探検コンピュータ」の授業満足度は比較的高い数値になっている。また、アプリケーションの操作スキル主体の「Ⅰ」より、情報活用力の習得を目指した「Ⅱ」のほうが満足度の平均値が高いという結果が得られたが、全体平均にも前後期で 0.09 の差が見られ、一概に「Ⅰ」より「Ⅱ」の満足度が高いとは言えない。しかし、座学的な要素が多く含まれ、思考力を要求する「Ⅱ」の満足度平均値が「Ⅰ」と比較しても見劣りしないということは、アプリケーション操作から応用領域に学生の関心が広がってきていることを示唆しているのではないだろうか。

特別クラスの満足度は、2011 年度前期で 4.49 (回答数 35)、2010 年度後期では 4.27 (回答数 23) となったが、クラス数が 1 または 2 と少ないため、特別クラスを編成したことによる要因よりも、教員個人の授業運営方法や学生の学習意欲に依存するところが大きく、これらのデータだけで満足度の高低を議論することは困難である。

年 2 回開催している、探検コンピュータ担当講師の打ち合わせ会では、現場からの直接的な意見が交わされている。「Ⅰ」では、アプリケーションの操作方法の説明を簡略化したテキストを使用しているため、初心者のクラスでは補助プリントが必要になること、セキュリティと情報モラルに関する内容が表面的で具体例に乏しいため、学生の集中力が持続しないことなどが指摘されている。「Ⅱ」では、課題が豊富なセクションは学生の学習意欲を維持しやすいが、説明が主体の箇所では話を聞かせる工夫が必要なこと、Excel を用いたデータ分析のセクションでは、分析の意味が理解できない学生が相当数存在することなどが課題として挙げられている。また、「情報活用力」のテキストを購入すると、NEST<sup>5)</sup>と呼ばれるテキスト連動型の e ラーニングサイトが利用できるのだが、テキストでは説明されていない内容が確認テストに含まれるなど、使い勝手に問題があるとの意見があった。

### 2.2 「コンピュータの世界」の評価と今後の課題

「コンピュータの世界」の授業評価アンケートの満足度を集計した結果、2011 年度前期では 4.73 (回答数 41)、2010 年度後期では 4.25 (回答数 12) となっ

た。授業数、受講者数、回答数が少ないが、講義的な要素の強い科目も実習的な要素の強い科目と同様の高い満足度を示している。しかし、もともとコンピュータやインターネットへの関心が高い学生が主な受講者であることが高い満足度の一因であると想定され、今後は受講者数を増加させるため、「探検コンピュータⅡ」の授業で「コンピュータの世界」の授業内容を紹介し、学生の関心を喚起することを試みたいと考えている。

また、「コンピュータの世界」は講義から実習までさまざまな要素を含む科目群から構成されているが、全ての単位数が1であることも、学生の受講意欲をそぐ要因であると考えられる。2001年のカリキュラム改訂時には、「コンピュータの世界」は全て実習系の科目であったが、受講人数に上限を設けない講義によって幅広い知識を身につける科目が必要であると考え、2010年より科目名称を変更せずに内容を変更した。同じ科目群で認定単位数が異なる科目が混在すると混乱を招く可能性があるため、内容に応じて科目の名称を変更するなど、今後の対応が必要であろう。

### 2.3 「コンピュータの検定演習」の評価と今後の課題

「コンピュータ検定演習」の単位取得者は、2010年度前期が MOS Specialist 186 名、Expert 26 名、後期が MOS Specialist 217 名、Expert 36 名であり、他の情報系資格取得による単位取得者は皆無であった。本学では、語学など他の分野の資格取得による単位認定も行っているが、MOS による単位認定申請数が最も多く、これと日本漢字能力検定による単位認定数を合わせると、全申請の9割以上を占める状況である。

日商 PC 検定試験による単位取得者が存在しないのは、知名度が高くビジネスの知識が不要なために取得しやすい MOS に資格取得希望が集中していることが要因である。本学の資格サポートセンターでは、日商 PC 検定の資格取得講座受講者を募集しているが、受講希望者数が数名と非常に少なく、開講できない状況にある。独学で資格取得を試みる学生もおらず、実質的には意味をなさない単位認定規定となっている。また、初級システムアドミニストレータ試験は2009年に廃止され、これより難易度の低い資格として IT パスポート試験が実施されている。初級システムアドミ

ニストレータ試験は経過措置として残しておき、新たに IT パスポート試験による単位認定規定を加えたいと考えている。

## ま と め

本稿ではまず、本学の「情報科目」全体の構成と運用方法について述べた。全学必修科目として1年次に情報リテラシーの科目を設置し、2年次以降は講義系と実習系の選択科目を配置している。資格取得は授業とは切り分け、技能検定単位認定規定により単位を認定している。

次に、情報活用力の習得を目指した1年次必修科目の狙いと運用方法について述べた。高等学校での情報科目履修を前提として、応用的な側面を重視した授業を円滑に運用するため、レベル別クラス分けや特別クラスの開講など運営面での工夫を行っている。

情報活用力の習得を目指した授業は、教員の話聞く時間が相対的に多くなるため、授業の満足度が低下する可能性があると考えていたが、学生の授業評価アンケート結果を見ると、必ずしも操作スキル主体の授業と比較して満足度が低いわけではないことが明らかになった。

また、「コンピュータの世界」については受講者数の増加を目的とした取り組みが、「コンピュータ検定演習」については新たな試験に対応する措置が必要であることを述べた。

今後は授業評価アンケート結果と技能検定単位認定者数の年次推移などのデータを分析し、授業と単位認定改善のポイントを探っていきたいと考えている。

## 参 考 文 献

- 1) 佐伯勇, 2001, 『新しい情報リテラシー教育方針』, 甲南女子大学人間科学年報, Vol.26, pp.79-87.
- 2) 佐伯勇, 2005, 『大学における情報リテラシカリキュラムに関する一考察』, 甲南女子大学研究紀要人間科学編, Vol.42, pp.49-52.
- 3) noa 出版編, 2011, 『身近なテーマで作って学ぶ! 学生のための Office 2010&情報モラル』.
- 4) 本田直也監修, noa 出版編, 2011, 『考える伝える分かちあう情報活用力』.
- 5) noa 出版, NEST (Noa Education Support Tools), <http://www.noa-prolab.co.jp/demo/nest/>.